

共通教育通信

No. 7

1998. 11. 9 発行
三重大学共通教育委員会



試合が終って

目 次

共通教育委員会から

統合教育組織の運営に関する自己点検
評価委員会の危惧……濱 森太郎……2

統合教育部会の声

主題A 「総合科目と受講制限」
……岩本美砂子……3

主題B 「感性をみがく言語と芸術」
……山本 真吾……3

主題C をふりかえて「主題別科目群」
制度について……石谷 寛……4

主題D 「共通教育」の理念は浸透したか
……田中 晶善……4

主題E 「異文化理解は可能か」
……中川 正……5

主題F 「心と体を見つめなおす」分科会
……片倉 望……5

主題G 「環境問題と人間社会」
……朴 恵淑……6

主題H 「アジア太平洋の時代を振り返って」
……鈴木 基義……6

学生の声

総合科目を受講して……深堀 巧……7

書 評

「教育の自明性」の再考…伊藤 敏子……7

催し物

平成10年度共通教育特別講演会……8

統合教育組織の運営に関する自己点検評価委員会の危惧

学務専門委員会 濱

森太郎

1. 新カリキュラムの成立

一般教育問題検討委員会の審議終了を受け、具体的改革事項を審議するために1992（平成4）年12月に発足した教育改革委員会（委員長岩月章治工学部教授）では委員間の事実認識の違いが大きかった。1994（平成6）年4月に岩月教授の定年退官に伴い、委員長に就任した鎮西康雄教授（医学部）は学長の了解を得て一般教育委員会から委員を参加させることで事態の打開を図った。また1995年度から新カリキュラムへ移行すべく、その策定を一般教育委員会に依頼した。一般教育委員会はこれを受けて、先に取りまとめたカリキュラム改革案を基に各学部との協議に入り、同年12月には新カリキュラム案を評議会に提出し、承認を得る運びとなった。

教育改革委員会はその後、1995（平成7）年度に実施された新カリキュラムをベースに文部省との予算折衝に入り、基礎教育に情報科学基礎（2単位）を必修として追加開設すること、統合教育科目の総合科目、通常科目、共通セミナーをセット履修とする等の修正を受け入れて折衝を終わった。

2. 部会・分科会の組織と活動

こうして新規に誕生した新カリキュラムは、カリキュラムを実施する組織上の問題点を抱えていた。承知のように共通教育機構は共通教育機構長・共通教育委員会・カリキュラム専門委員会・学務専門委員会・各部会・各分科会・自己点検評価委員会からなる新型の教育組織である。このうち共通教育機構長以下、組織の中心部に位置する専門委員会ならびに一部の部会は、機構発足当初から機能したが、分科会に対しては自発的な努力を待つ形で1997年度（平成9年）を迎えた。1997年3月には関係委員会委員選出の必要もあり、順次、分科会を召集して部会委員の選出に取りかかったが、平成10年度に至っても分科会は活動的とは言いがたい状態が続いた。

「共通教育は定着したか」と題する1996年度「共通教育自己点検・評価委員会」（1997年7月発行）の報告には、こうした分科会の現状に関わる担当者の危惧が表明されている。しかし「共通教育が円満に実施できるかどうかは、機構の基盤となる各分科会が十分に機能するか否かにかかっている」（96年度報告、79頁）とする危惧は討議されないまま現在を迎えている。

担当者が多忙な上に新カリキュラムに対する学

生評価はおおむね順調に推移し、総合科目、共通セミナーを良しとする意見は継続的に過半数を越える状態が続いたからである。ただし学生評価の分析の中には「授業目標」への「接近」を阻んでいるのは主題B「感性を磨く言語と芸術」と主題F「心と体をみつめなおす」と主題E「国際理解と異文化接触」である。とりわけBは一貫して最低評価を維持している。（96年度版、5頁）という刺激的な指摘もあって、主題Bの責任者（当時は私だった）としてはひたすら当惑する始末である。

3. 統合教育分科会はなぜ機能しなかったか

冗談はさて置くとして、共通教育機構長・共通教育委員会・カリキュラム専門委員会・学務専門委員会以下の各組織が機構発足当初から機能したにもかかわらず、一部の部会・分科会が機能しなかった理由は何か。

カリキュラム全体の3分の1を占める語学・保健体育の場合は、旧来の「学科目」が「分科会」「部会」と重なり合うために、従来の活動を継続することが新組織の活動と直結していた。

基礎教育科目（理系基礎）でも物理・化学・地学・生物・数学・自然科学概論の各分科会は、旧来の「学科目」が「分科会」と重なり合うため従来の活動を継続することが新組織の活動と直結している。ただし、化学は担当者が3学部に分散し、自然科学概論は同じ生物資源学部ながら2コースに分散し、地学は同じく生物資源学部ながら学科目自体が解体している。

一方、統合教育科目の約半数を占める人文・社会系の主題別分科会は、主題毎に構成される各分科会が「学科目」横断型に編成されているため、分科会と学科目との間に1対1の対応がない。これらの主題別分科会ではもともと分科会型の組織活動を持続することが未知の経験に属することだったのである。当然これらの分科会には分科会を維持する新規の組織基盤（予算・設備・システム）や活動方式が必要だったにも関わらず、その工夫や提案は等閑にされた。こうして1996年度の点検評価報告にある分科会活動に対する危惧は、現実のものになり始めた。したがって共通教育機構の問題はこれから始まることになる。これからの組織運営のテーマは分科会を活発にする方策の発明である。

（はま もりたろう 人文学部）

統合教育部会の声

主題A「総合科目と受講制限」

—または、あるオーバーワークの記録—

岩本美砂子

「総合科目 女性論」の開講責任者を数年やっているが、受講制限をしたことがなかった。月曜日7~8時限で120ないし190番教室で開講してきた。前期または後期のみの2単位で、登録者はおおよそ200名(男女半々)で安定していた。レポートを2回出せというハードルは、7割ほどがクリアする。私が甘いせいかな、完走した学生の合格率(2通のレポート評価の合計)は結構高い。以上が例年の数的データである。

学内・外のゲストによるオムニバス講義なので、学生のレポートは、その回の講師と私が二重にチェックする。誤字脱字、文章のまずさ、事実関係の間違いなどについて私が青でコメントした上、担当講師に回覧。A~Dの評価と、更なるコメントを赤で記入してもらう。1回目のレポート(コメント記入済み)を、学生が2回目のレポートを書く前に返却するように努力してきた。さらに今年は、2回目のレポート締め切りを夏休み前に設定してコメントのための時間をとり、9月の採点締め切り前にジタバタしなくてすむようにして、9月はレポートの確実な返却と、ビデオ上映・感想提出という新しい仕組みをつくっておいた。が…甘かった!

教養改革が今も進行中なのは頭で理解していても、他学部の教養必須科目削減にともなう時間割変更のトバッチリを、失礼!、影響をまともに食らう可能性があることに、想いが足りなかったのだ。登録は360名、レポートは各回250通に上った。理系の受講者の少ないコマだったのだが、今年度は医学部の裏番組(また失礼!)の必須科目がはずれ、同学部の受講者が急増した。彼らの多くは、1回目のレポートのテーマを「介護(高齢社会と女性)」、2回目を「中絶・避妊をめぐる政策」とした。ニーズの受け皿にはなったと思っている(エッヘン)。

受講制限をしないことも、講師と私がレポートを二重チェックすることも一回目にうたったので、変更するわけにいかず(いや、変更するべきだった)、前期はひまさえあれば計500通のレポートに、朱ではなく青のペンを入れ続けるという羽目に陥った。別の事情で腱鞘炎にかかったが、2通のレポート合計による最終評点をつけ終わるまで、直りが悪かった。ティーチング・アシスタントも機動的に頼めるかどうかかわからず、講座の予算で院生のアルバイトを頼んで、機械的な整理などをやってもらった。もし今年度入学生の一部で、(以上のような事情からとりわけ医学部で)、文章能力のわずかな改善でもあれば、多としたい。来年度からは、必ず200字ほどの文章を出してもらって、受講制限を実施する。

(いわもと みさこ 人文学部)

主題B「感性をみがく言語と芸術」

山本真吾

主題Bは、開講形態別に挙げると、3つの総合科目と10の通常科目そして6つの共通セミナーより構成されている。内容はもとより開講時限や成績評価の方法にも工夫を重ね、より適切な運営を目指している。目下のところ受講人数に極端な増減もなく、また学生諸君の受講状況も概ね良好であり、共通セミナーで「門前払い」される事態も生じておらず、健全に運営されていると現状評価してよい。とりわけ前期の総合科目として、現代的問題に迫る「メディアと表現」を開講し、数次に及ぶレポート提出を課すこと等によって知識が着実にかつ段階的に獲得されるように工夫されている。「最初の関所」が安易な受講態度を拒み、真剣に学ぶものが正しく評価され次に進むことができるのである。

開講上さらに目指してゆきたいことを、箇条的にまとめるならば、次の二点になろう。

- (1) 総合科目について;現状のスタッフでは運営困難な面も多いが、音楽を主軸に据えた授業が開講できないか。
- (2) 通常科目について;文学・語学関係の授業において日本に偏りが見られることから、東洋・西洋文学の開講も将来的には模索する必要があるのではないか。

受講生諸君に望むことは、一つに、人と人との「こころ」の距離が疎遠になってきたといわれる現代において、コミュニケーションの道具として人間が高度に発達させた「ことば」の問題を、自分たちの身近な問題として見つめてほしいと思う。第二に、「感性」の枠は、決して凝り固まった融通のきかないものではなく、自らの自覚によって、また「みがき」をかけることによって、どのようにも変化しうるものである。感受性豊かな青春のこのときを逃さずに、とっつきにくそうな音楽も、なんの変哲もない一枚の絵も、人生の深い意味をそこに汲み取ることが可能であることを経験的に学んでほしい。

(やまもと しんご 人文学部)

主題Cをふりかえって 「主題別科目群」制度について

石谷 寛

共通教育の新しいカリキュラムが実施され、「主題別科目群」が発足してから3年半、共通教育機構が誕生して2年半、「総合科目」「共通セミナー」が必修化されて1年半がたった。その間、戸惑いながらも縁あって主題Cの創設に関わり、そのまま関わり続けている者として、主題Cの局所的視点から「主題別科目群」制についての私見と個人的反省をまとめてみたい。

全国の大学で一般教育・教養教育の大きな改革が進められた。三重大学でも改革の方向につき議論が重ねられてきた。そのなかで浮上してきたのは、それまでなんの脈絡もなく機械的に受講されてきた一般教育科目に、なんらかの方向性を持たせて副専攻「的」のまとまりを持たせたいとの意見であった。社会分野、人文分野、自然分野の3分野に大ざっぱにくらわれていた一般教育科目から基礎教育科目を独立させ、他の科目を内容の関連する講義群に分類し、「主題別科目群」と名付けようとの意見である。一方では、そのような学問上の方向付けは、受講者個人の自律的判断に任せるべきであるとの意見もあり、当初は受講例を示すガイダンス的なものとして「主題別科目群」はスタートした。

このなかで、情報関連科目、基礎教育を除く数学、統計学をひとつのグループとし、主題Cを構成した。現代では、これらの分野は物理学、工学、経済学、生態学、金融、言語理論、暗号等々の幅広い分野に関わっている事から、主題C「情報化社会と数理科学」と名付けた。この主題の全体を見渡すガイダンス的講義として多数の教官による総合科目を創設し、より少人数の学生を対象として参加体験型の学習を進めるために共通セミナーを設けた。当初の予想では、数学の関わる主題であるので、この主題の下に履修していく学生の数は他の主題に比較して少数にとどまるはずであった。その予測のもとに開講コマ数等を計画した。

ところが、いざ実際にスタートしてみると、コンピュータを実際に用いての講義のあるせいか、年度によって差はあるが150名から250名の受講生が登録し、特に受講人数の限られる共通セミナーや情報科学概論等で受講生の希望にそえない事態が生じてしまった。その後、さまざまな理由から「主題別科目群」が必修化され、さらに共通セミナー、総合科目も必修化されるにおよんでは、各科目の有機関連性をつけることより現実への対策に振り回される事となった。幸いにも、さまざまな教官のご協力により、なんとか大きな混乱無しに今日に至っているが、正直なところ薄氷を踏む思いであった。この間、受講生の皆さんにはさまざまな迷惑をかけたのではないかとおそれている。当初の主題別科目群制度の目的・方向は間違っているとは今でも思わないが、それを実現してゆくことの困難さは実感している。

このような中で、相変わらず単位さえとればと、安易に単位の取りやすい授業に集中する学生も数多く見られる一方では、自律的に問題を掘り下げ、主題論文にまとめようと試みる学生も、数多くはないが、見られるようになったのは、心強い限りである。今後、放送大学との単位互換その他の補助的手段等を通じて、主題の充実が計れればと思っている。受講生の皆さんの積極的参加を期待したい。

(いしたに ひろし 教育学部)

主題D「共通教育」の 理念は浸透したか

田中 晶 善

「主題D」(自然は生きている)の個別講義・セミナーの開講状況や担当教官の意見等については、最近刊の『大学教育研究』第6号、1-11頁(共通教育機構発行)に詳しい『開講記録』をすでに報告した。

一言で言えば現状では主題D固有の差し迫った問題はない。主題Dで論文作成をした学生は、今年度はわずかに1名のみであったが、これも主題Dであるが故の問題ではないと思われる。各講義やセミナーを個別にミクロに見る限り、受講生や担当教官の誠意と努力により、それなりの成果を挙げている。(基礎教育科目の現状を扱った『理系基礎教育科目アンケート調査の結果と解析』大学教育研究、4、93-101も参考になろう。)

大学一般の講義について一部「世間」では「手垢がついて黄ばんだノートを読み」云々と、それこそ手垢のついた表現で揶揄する風潮もあるが、個別の講義等に関する限り、飛躍的な改善の余地がそれほどあるわけではない。百年後の学生でも、化学の周期表はある程度暗記せざるを得ない。

問題があるとすれば、個別の講義や個別の主題ではなく、それらがはめ込まれているマクロな構造の方であろう。三重大学において、教育体制が「一般教育と専門教育」から「共通教育と学部別教育」へと大変革を遂げてからすでに数年が経ったが、この改革が教育上の進歩につながったか、については確信が持てない。共通教育の理念の一つは、全学生を共通の対象として全教官が共通に責任を負う、ということであるが、この理念がどこまで浸透しているだろうか。

講義を「負担」と表現して怪しまない風潮。あるいは、確かに「負担」としか表現できないような一面の状況。「ペーパーの数」をやかましく言われる中、研究にいそしむ姿を横目に、主題責任者として、「ペーパーの数」には決して数えられないこういう文章を書く責任があるのは、確かに「負担」、だなあ…。

(たなか あきよし 生物資源学部)

主題E「異文化理解は可能か」

中 川 正

統合教育科目の主題E「国際理解と異文化接触」の講義や演習を担当して3年目になるが、主に私の専門としている文化地理学の領域から、アメリカ文化に迫ろうと努力してきた。

異文化を学ぶうえで最も危険なことは、「その文化はもう分かった」と思いこんでしまうことではないかと思う。ある地域の文化に関して講義で学んだり、その地域を訪れ、その文化の中で実際に生活したりすることは確かに貴重な経験である。しかし、自分一人が学び、体験できる領域はきわめて限られており、学べば学ぶほどわからなくなることは、異文化研究にはつきものだと思う。

私は学生時代に、アメリカを知りたいと思って地理学に志したが、講義をとっても分かったという気持ちにはなれなかった。だから大学院に行き、アメリカに5年間留学した。一年目はできるだけ多くのパーティに参加し、大学の行事という行事には顔を出し、なるべく多くの人々とつきあおうとした。しかし、分かったような気がしなかった。二年目からはルイジアナ州文化財保護局から、あるカウンティの築50年以上の建築物の記録する仕事をもらい、3年間で千戸以上の家をまわった。しかし、まだアメリカを分かったとは思えなかった。三年目以降にはルイジアナの墓地研究に取りかかり、ルイジアナ全域をまわり、400の墓地を訪れ、25万の墓を数えた。しかし、アメリカを分かったという実感はなかった。ますます分からなくなっていった。

しかし、一ついえることは、学べば学ぶほどアメリカが好きになり、もっと知りたいと思うようになっていったことだ。もっといろんな人から学びたいし、話も聞きたい。本も読みたい。調査もしたいと思っている。

何も知らない私が「そもそもアメリカ文化とは・・・」などと教えられるはずがない。でも、アメリカが好きで、もっと学びたいという気持ちは伝わることもあるのではないかと思う。

(なかがわ ただし 人文学部)

主題F「心と体を見つめなおす」分科会

片 倉 望

今どきの学生の興味に即したテーマを設定し、学習意欲を高めるとというのが主題設定のねらいであったとすれば、必ずしもその試みは成功しているとは言えないようである。例えば、三重大学共通教育自己点検・評価委員会が編集した1996年度版『共通教育は定着したかー 現状と課題の把握のためにー』に掲載された学生の声、「主題制はあまり好ましくない。僕は主題Dなのだが、主題Gや主題Eにもたくさん受けてたい授業がある。主題Dの授業を受けなければいけないためにそれらが受けられない。」などを見る限り、むしろ主題制は学生の自由な選択の意思を妨げ、学習意欲を殺ぐ役割を果たしている面があると言わざるを得ない。すなわち、教官側が勝手に設定した主題は、かなりの部分で今どきの学生の問題関心と齟齬し、アナクロ的な問題の押しつけとして作用しているのである。

些か言葉がきつくなったが、現実にはそのような学生の声がある以上、謙虚に主題制の問題点を見つめ直し、カリキュラムを早急に再編するのが教育者たるものの良心ではないかと、私は考えている。もとより、教官の目から見ると、今どきの学生が、本来の活気を失っているように見えるのも事実であり、たとえあまり成功したとは言えなくとも、何とか学生諸君にやる気を起こさせようとした教師としての情熱にも、それなりに真摯なものはあった筈である。だとすれば、「過ちて改めざる、是を過ちと謂う」と言った古の賢人の言葉に従うのが、共通教育に携わる教師としての正しいあり方なのではないだろうか。

主題Fは、現在一学年の三分の一近くの受講者を抱えて教官、学生共々よろめきながら必修をこなしている。八分の一の主題が三分の一の学生を抱えるという異常性に、正常に反応する教官の良心に期待したい。

(かたくら のぞみ 人文学部)

主題G「環境問題と人間社会」

主題G責任者 朴 恵 淑

主題Gは、人間が地球と地域の環境と共存できるのかを探ることを狙いとする。それを解くには環境の特性を知り、かつ人間社会の制御の可能性を模索しなければならないので、総合的な視点が求められる。内容は、地球科学、環境科学、化学、工学、医学、農学、地理学、生物学、社会学など実に多岐に渡っているが、基本コンセプトは人間が取り組んでいる自然との持続可能な循環系を考えることに尽きる。その中の一つの例を挙げて、具体的な理解を求めたい。

共通セミナーGは、「地球環境問題の本質と各学問の役割」をテーマに、野外観測や調査などを行い、人間の活動が環境にどのような影響を与えているのかを直接体験するセミナーと、文献検索などのデスクワークによる成果を用いて、教官と学生が徹底的に討論することから解決策を探るセミナーとで構成されている。前者の例としては、「伊勢湾海浜環境調査・(勢水丸に乗って)海に親しむ・土は生きている」などが、一方、後者の例としては、今日の環境問題を「主体的な参加」を通して考える・科学的思考と方法が消費を考えるときに重要であることを学ぶなどが挙げられる。さらに、両者の混合型としては、地球環境問題における地理学の役割・まちづくりデザインゲームー都市計画と市民参加ー環境利用と伝統的産業・生活環境のアメニティーを考えるなどが挙げられる。

学際的・総合的な接近が可能な統合教育によって、地球・地域規模での様々な環境問題に対して、環境保全の適切な対応とは何かを教官と学生が共に考えることができる。共通セミナーGは、受講者本人が決めたテーマについて、方法論こそ異なるが、野外観測・調査・デスクワークなどの手法を通じて得られた成果、結果について発表、報告書を書くことが課題となっている。つまり、テーマの選定から方法論探り、成果を得るまでの一連の過程について数回の発表、報告することによって、受講者一人一人の効果的な表現力の向上をはかることができる。

一方、各々の授業科目間の横断的なつながりが薄いことが問題点として残る。その解決策の一つとして次のような試みを紹介したい。地球環境問題における地理学の役割と環境利用と伝統的産業・生活環境のアメニティーを考えるセミナーは、授業時間こそ異なるが、野外調査(岩田川)の際に、合同で行うことによって、調査項目の充実や集約的な野外調査が可能となり、非常に質の高いレポートをまとめることができた。つまり、柔軟なセミナーの運営によって、より効果的な教育効果が上がったといえる。他のセミナーとの関連性をさぐり、効果的な運営についての今後の検討が必要課題となる。

最後に、受講者へのアナウンスですが、21世紀は「環境の世紀」ともいえるほど、大気、海洋、生態系のすべてを含む地球や地域規模での環境問題が最も深刻な時代となることが明らかである。持続可能な地球を保つためにも、環境問題の本質と対策を練らなければならない。一人でも多い受講者が主題Gに関心を持ち、参加することを期待したい。

(ばく けいしゆく 人文学部)

主題H

「アジア太平洋の時代を振り返って」

鈴木基義

「アジア太平洋の時代」は、主にアジア太平洋諸国の政治・経済・文化について、10人の講師に熱く語ってもらった。まず講義スケジュールを示すと、「第1回オリエンテーション」に引き続き、「第2回元ラオス青年海外協力隊を呼んでーボランティアと技術協力」(元青年海外協力隊員毛受誠)、「第3回メコンにたゆたう開発の波ー膨張するパース経済圏ーアジアの成長とラオス」(人文鈴木基義)、「第4回近くて近い国……韓国」(人文朴恵淑)、「第5回すべての道はクスコに通ず:インカ帝国の聖なる都」(人文加藤隆浩)、「第6回中央アフリカ・ザールの現状と未来を考える」(生物資源学部Sanga-Ngoie Kazadサンガ・ンゴイ・カザディ)、「第7回日本の経済協力」(外務省無償資金協力課真鍋寛)、「第8回太平洋の民族とミニ国家」(人文石井眞夫)、「第9回沖縄と太平洋問題」(人文目崎茂和)、「第10回メコン河流域開発と国際協力」(通産省通商政策局折山光俊)、「第11回まとめ:経済発展と日本の援助」(人文加藤隆浩・鈴木基義)であった。230人ほどの受講生に対し無謀にも毎回出席をとったので、最終回まで欠席するものや落ちこぼれる者はまれであった一方、集計に忙殺された。また毎回レポートを義務づけたので、学生も大変であったと思うが、学生の提出してくるレポートを読み、それを集計するという作業には大いに苦しんだ。しかし、毎回興味深い専門家の話に講義中に寝るような学生や無駄話をする学生がおらず、双方にとって充実した半年間であったように思われる。

(すずき もとよし 人文学部)

学生の声

総合科目を受講して

深堀 巧

他の大学ではどのようなになっているかは知りませんが、共通教育にはA～Fまでの主題が設定されていて、その一つを選択し、履修し、その主題についての関心、考えを深める統合教育があります。各主題の名前自体は、一見しただけでは、どんな内容なのかさっぱりわからなかったのですが、多様な講義をまとめて呼ぶにはそういった名前しか出てこないのでしょうか。

私にとって、共通教育、中でも総合科目は特に記憶に残る講義でした。私は、主題F「心と体を見つめ直す」を選択していましたので、その総合科目である「東西の〈魂〉をたずねて」という講義を受講しました。「魂」というものを、哲学的、宗教的、医学的アプローチから考え、また、東洋、西洋それぞれの地域が持つ「魂」観とその差異、といった多角的な切り口に、私は非常に興味を持ちました。日頃から、このようなテーマは関心があったのですが、各教官による独特の内容は、私にとっては新鮮味のあるものでした。この講義は、今でも私の考え方に影響を与えています。高校生の時にこの総合科目を受ける機会があったならば、今の私は（もっとよい状態に）変わっていただろう、とふと思うときさえあります。

ただ、一つだけ困ったことがありました。それは、総合科目を受講している学生の態度が、非常に悪いという点においてです。講義中に私語は多い、授業中の出入りも多い、まともに出席しない人もいたので、私は腹立たしいやら、情けないやら、一人で気を滅入らせていることもありました。この学生の意識は是非とも変わってほしいものです。総合科目の有意義さを理解すれば変わるはずですが。私は、これから総合科目を受講する人に、総合科目を受講することの意味と、その楽しさを知ってほしいと願うばかりです。

(ふかほり たくみ 教育学部2年)

書評

「教育の自明性」の再考

『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想

—メディアのなかの教育—』今井康雄 世織書房 1998

伊藤 敏子

1892年、ベルリンのユダヤ人の家に生まれたヴァルター・ベンヤミンは、ファシズムによるユダヤ人迫害のなかをパリに亡命し、パリ陥落後にはさらにアメリカへの亡命を試みながら果たせず、1940年、ピレネー山中で自らの命を絶った悲劇の人であり、また、ハイデガー、アドルノ、ハーバーマスとならんで今世紀を代表するドイツの思想家と目される人である。1960年代以降、「ユダヤ神秘主義者」(ショーレム)、「社会批判的審美家」(アドルノ)、「急進的マルクス主義者」(ブレヒト)とさまざまに評されてきたこのベンヤミンを、「教育」—とりわけ教育の概念を今日においても規定し続けている新教育—の枠組を解体した「教育」思想家として紹介する爽快な書がこのほど出版された。今井康雄氏による『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想—メディアのなかの教育—』(世織書房)がそれである。「純粋な精神の抽象性を感じて常に共振している感情をこそ、ぼくは青年と呼びたい」と記したベンヤミンは、この精神主義にたつ人間観を今世紀における大衆芸術のコンテクストのなかで読み解く。ベンヤミンがここに提起する「自然と人類の新しいふれあいのためのメディア・モデル」へのまなざしは、テクノロジーやマスメディアによって生み出された「経験の貧困」がさらに加速されるなかで生きるわれわれにも大きな示唆を与えてくれる。教育の自明性から抜け出し、ベンヤミンとともに美的体験の日常化へと踏み出すとき、そこには今まで見えなかったまったく新しい世界がたちあらわれてくるはずである。ベンヤミンの著作については、全十五巻の『ヴァルター・ベンヤミン著作集』(晶文社)が出ているが、教育に関するベンヤミンの小品を集めたものとして『教育としての遊び(原題:子ども、青春、教育について)』(晶文社)があり、ベンヤミンの「教育」思想と出会うための入門書として推薦したい。

(いとう としこ 教育学部)

平成10年度共通教育特別講演会

講演題目 大学はミニ・オヤジ社会か？

大学は公明正大な学問の府か？
それとも治外法権のセクハラの温床か？
大学はオヤジ予備軍を生産しているのか？
大学に問題解決の真の自治能力はあるか？

日時 平成10年12月7日（月）13：00～14：30

場所 共通教育校舎190番教室

講師 ^{うえ}の^{ちづこ}野千鶴子 氏（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

《プロフィール》

1948年 富山県生まれ
京都大学大学院社会学博士課程修了，平安女学院短期大学助教授，
シカゴ大学人類学部客員研究員，京都精華大学助教授，
ボン大学客員教授，国際日本文化研究センター客員助教授を経る。
1993年 東京大学文学部助教授（社会学）
1995年 東京大学大学院人文社会系研究科教授
専門分野 ジェンダー理論，セクシュアリティ研究

構造主義社会学，マルクス主義フェミニズムの新しい理論化の道を探りつつ，さまざまな領域で刻々の情勢と取り組むしなやかな姿勢を保ち続ける。CM写真を記号論的に解説して男と女の間を軽妙な文体で論じた『セクシギャルの大研究』（光文社）で注目されて以来，話題作も多い。1994年『近代家族の成立と終焉』（岩波書店）で，サントリー学芸賞を受賞。

※ 学生，教職員等多数ご参加ください。